



明野歴史民俗資料館では、第13回企画展「人生儀礼～誕生・結婚・葬送～」を9月30日まで開催しています。ぜひ、お越しください。
※土日祝祭日は休館となります。ご注意ください。（内海）

人生儀礼～誕生・結婚・葬送～

「誕生」についてお話しした52号に引き続き、今回は「結婚」についてお話しします。

世話好きの「ネコギ」と呼ばれる人が、結婚の話を持ってきました。縁談をまとめるのは容易なことではなく、「ネコギは足袋を八足切らす」と言われたそうです。縁談が決まると、媒酌人ばいしやくにんを務める「ゴチュウニン」と呼ばれる人が、祝儀樽しゆぎだん2つを持って嫁宅に「サケイレ」を訪れ、祝言の日取りを決めました。

嫁入り道具は、一週間前から前日までに婿宅に運ばれ、居間など、目につきやすい場所に飾って来客に見てもらいました。戦前の花嫁の多くは、白無垢ではなく、黒の無地が裾模様のある着物を着て、島田に結った髪つのかくに角隠しわたりぼしもしくは綿帽子わたぼうしをつけました。

祝言当日には、まず嫁宅で「オタチブルマイ」と呼ばれる祝宴が開かれ、婿方からはゴチュウニンが出席しました。オタチブルマイが終わると、花嫁は、「ゲンゾウニン」と呼ばれる近親者とともに実家を出ました。実家から出る時は、縁側から出ます。「敷居を二度とまたぐな」という意味で、花嫁が出た後、部屋を掃き出すこともありました。

嫁入りは元々夜に行われていたため、嫁入り一行は提灯ちとうちんを持って婿宅に入り、花婿側も提灯を持って出迎えました。花嫁は勝手口などから家に入り、土間に埋め込まれている藁叩き石わらたたをまたぐなどしました。これには、「石のように一生その家にいる」、「お勝手の者になる」などの意味があります。

祝言の始めにはゴチュウニンによって双方の紹介などがされ、その後、夫婦盃・親子盃・兄弟盃など、新しく関係を結ぶ間で盃を交わす「盃事さかづきごと」が行われます。盃事が終わると、「オショーバン」と呼ばれる人が司会をする祝宴となりました。祝宴の最後には、花嫁が実家から持参したお茶を淹れます。このお茶を「イケッチャ」と呼び、「行け」という終焉しゆうえんの合図だとされます。

祝言の翌日には、花嫁と花婿で餅を搗きます。その後、花嫁は近隣への挨拶回り「ムラアルキ」をします。近隣の家だけでなく、氏神や寺にも詣でました。その翌日には、花嫁の実家に、花嫁と花婿がゴチュウニンとともに里帰りをしました。祝言から3日目ということで、これを「ミツメ」と呼びます。



サケイレ (須玉町史) 所収



生家を出る (中山梅三撮影 山梨日日新聞社蔵)



提灯を持って出迎え (中山梅三撮影 山梨日日新聞社蔵)



村の神社におまいりする花嫁さん (内田宏撮影 NPO法人地域資料デジタル化研究会蔵)

第13回企画展「人生儀礼～誕生・結婚・葬送～」は、9月30日までの開催です。どうぞお見逃しなく！